

山陰海岸における海浜植物・海浜植生の保全推進

海岸域の環境・植物

日本列島は 6800 余もの島からなり、海岸線の総延長は約 32800 km におよびます。その長大な海岸線に沿って、砂浜、砂丘、礫浜、海崖（かいがい）、塩湿地といった様々な環境が広がっています。これら海岸域に特有の環境には、砂の移動や吹きつけ、潮風、海水の飛沫といった影響下でも生きることのできる「海岸植物」が生育しています。海岸植物の中でも砂浜・砂丘や礫浜を主な生育地とするものは「海浜植物」とよばれます。

日本に自生する海岸植物は約 280 種ほどあります（維管束植物種に限る）。これは国内に分布する維管束植物種の約 4% に相当します。海岸域は大きなスケールでみれば線状であり、国土全体に占める面積も大きくありませんが、特異で多様な種が集中的に分布する、生物多様性保全上、重要な環境といえます。

海岸植物の危機

海岸植物の生育地として重要な海岸域ですが、自然性をよく保った海岸域は、特に 1960 年代の高度経済成長期以降、急激に減少してきています。その要因は人工護岸化、埋め立てといった人為的改変です。環境庁（現環境省）によると、全国の海岸（汀線）の区分比率は自然海岸が 55.2%、半自然海岸が 13.6%、人

工海岸が 30.3% となっており（ほか河口部が 0.8%）、何らかの人為的改変を加えられた海岸が約半数に達しています。また自然性をとどめた海岸であっても実際にはその多くが海水浴などレクリエーションの場として利用されており、多かれ少なかれ私たち人の影響を受けています。最近では四輪駆動車の走行により植生が破壊されるなど深刻な事態も見受けられます。このような状況を受け、国内では多くの海岸植物が存続の危機にさらされています。その保全は海岸域の生物多様性・生態系機能を維持していく上で急務の課題となっています。

プロジェクトの目的・進捗状況

プロジェクトの最終的な目的は、「海岸植物の保全をどのように進めていけばよいか？」という問いに対し、様々な視点から応えることです。

一口に海岸といっても、その大きさや形状、周辺の開発状況、人為的影響の程度は様々で、それに伴って海岸植物の植物相や多様性は異なると予想されます。そのような自然・人為条件と海岸植物との関係性を探ることは、海岸植物の豊かさを左右する要因は何か、どのエリアに海岸植物が集中的に分布・定着しているか、管理・活用と保全の両立に向けてどのような配慮が必要かなど、具体的な保全策を検討する上で有用な情報をもたらすことが期待されます。

また海岸植物の生態的特性は種により様々です。海岸植物の中でも、減少の著しいものや分布のごく限られたものは絶滅危惧種に指定されています。そのような種を保全していくためには生態的特性を詳細に調べ、その存続にどのような環境が必要なのか明らかにしていく必要があります。調べるべき項目は無数にありますが、現在は種子の発芽特性や実生の成長特性を中心に調査研究を進めています。

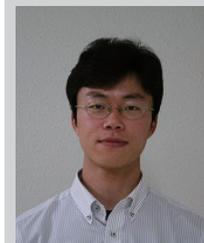
本プロジェクトでは海岸植物の中でも地域絶滅の傾向が顕著な海浜植物を主な研究対象としています。野外調査は山陰海岸（山陰海岸国立公園）とその周辺の海岸域で行っています。山陰海岸は、京都府京丹後市網野町から兵庫県を経て鳥取県鳥取市に至る約 75 km の海岸線をもつエリアです。調査・解析で得られたデータ・成果は、学会や論文での発表のほか、セミナーや展示などにも活用していきます。一連の活動を通じ、地域資源の発掘・保護にも貢献できればと考えています。



琴引浜（京丹後市網野町）の海浜植生
鳴き砂で有名な琴引浜には比較的自然性の高い海浜植生が残存し、多くの海浜植物が生育する。



イソスミレ *Viola grayi* Franch. et Sav.
北海道から鳥取県にかけての日本海側に分布する海浜植物であるが、各地で減少が進んでいる。



山陰海岸における海浜植物・海浜植生の保全推進

代表者：黒田有寿茂

協力者：澤田佳宏（兵庫県立大学 緑環境景観マネジメント研究科）

財源：兵庫県立大学特別研究助成金（平成 23 年度）、科研費（科学研究費助成事業）若手研究（B）（平成 24 年度～）